幽玄

題字　高秀秀信

横浜能楽連盟
会報 No.50
平成27年9月30日

理解は知ることから始まる

会長　馬場　洋一

横浜市では、小中学校を対象に、平成16年度から芸術文化の学校プログラムを行っており、平成20年度からは「横浜市芸術文化教育プラットフォーム」として強化された。「アーティストが学校へ」を売り文句に、小中学生のころから芸術を体験し鑑賞して、身近に感じてもらうのが狙いだそうだ。初年度は6校だった実施校数は26年度には134校にまで広がった。

ジャンルは多岐にわたる。もちろん能楽も対象である。最も多いのは音楽（44校）、次に伝統芸能（34校）であるが、狂言が10校、能は1校にすぎない。芸術団体・文化施設等がコーディネーターとなり、学校と相談してジャンルを決めるそうで、まだまだ学校にとって能は敷居が高いということだろうか。

「理解するためには、まず知ること」という言葉が思い浮かぶ。横浜能楽連盟がやらねばならないことは多い。

今年、「理解してもらう」にチャレンジした女優が、横浜にいる。「横浜夢座」の座長である五大路子さんは、横浜を代表する女優である。戦争により人生を大きく変えられた実在の老娼婦をモデルにしたひとり芝居「横浜ローザ～赤い靴の娼婦の伝説～」に、ライフワークとして取り組み、今年で19年目を迎えた。毎年、終戦記念日前後に公演を行い、常に満席である。

戦後70年の今年4月、長年の夢であったそのアメリカ公演がニューヨーク・ジャパンソサエティの招聘により実現した。それに備えアメリカ公演用に演出を変え、英語字幕も駆使した。

老娼婦が赤いバラを捧げ持ち中空に目を据えて無言で客席を回り、舞台の光の中へ消えて芝居は終わる。この時、五大さんは、佐渡・正法寺のろうそく能で「山姥」を観て感動して以来山姥の気持ちで歩いているという。米国の担当者はこの部分の変更を提案したが、五大さんは応じなかった。

先の大戦の「敵国」であり、文化も言葉も違う国で受け入れられるのか、理解してもらえるのか。2回の公演は満席で「ブラボー」の声が飛び交い、カーテンコールではスタンディングオベーションだったそうだ。理解された。大成功だった。

五大さんがアメリカ公演を成功させた例に倣えば、能楽も、もっと身近に感じてもらえるよう努力する余地は大きく、可能性は広がる。横浜能楽連盟が今年から設置した「会員増強プロジェクト」は、答申をまとめ、緒についたばかり。まだまだ努力をしていかねばならないと、肝に銘じている。

知っていただき、理解していただき、「能楽愛好者」になっていただくにはどうしたらよいか。「伝統芸能を子・孫に伝える」役目をどうしたらもっと果たせるのか。横浜能楽連盟がやらねばならない課題は、まだまだたくさんありそうだ。

連盟報告（26年度後期）

企画事業担当　青山　圭佑

一、「五流交流のつどい」について

連盟主催の「第18回五流交流のつどい」は、平成27年3月14日（土）、当番幹事金春流により開催されました。（別項参照）

26年2月の降雪中止を受けて今年度より3月に変更し、無事開催となりました。

二、平成27年度総会について

27年度定期総会は、4月27日（月）午後2時から横浜能楽堂2階レストランにて開催されました。

当日の出席者及び委任状により総会は規定通り成立し、馬場会長を議長として、総会議案により議事が行われ、各議案が承認されました。

また、横浜市文化観光局よりの来賓祝辞があり、横浜能楽連盟への後援窓口は同局の文化プログラム推進部が担当するとの話が出ました。

横浜能楽堂からも、担当グループ長が出席され、横浜能等への協力要請がありました。

三、「第63回横浜能」について

平成27年6月20日（土）、横浜能楽堂において、能「西王母」（観世流・シテ岡本房雄）狂言「止道方角」（和泉流・野村万蔵）により開催されました。チケットは完売、来場者率は92・6％でした。

来年度は「第64回横浜能」として宝生流が出演予定です。

四、「第30回記念横浜五流能楽大会」について

平成27年10月3日（土）に、宝生流を担当幹事として開催予定です。

五、会員の動向について

平成27年6月25日現在の会員数は423名で、内訳は観世流174名・観世流梅若会43名・宝生流53名・金剛流56名・金春流46名・喜多流25名・下懸宝生流22名・面友会4名、団体会員は42団体となっております。

高齢化による会員の減少傾向が続いているため、連盟として「会員増強プロジェクト」を立ち上げ、長谷川武雄理事（観世流）を長として各流派の理事に委員として参加をお願いし、増強方法を検討していただきました。提出された案は今後の理事会において検討し、活動方針とする予定です。

連盟後援について

4月の総会時にお知らせしたように、今後社中の発表会等の番組に「後援・横浜能楽連盟」と入れるには、事前に申請をしていただくことになりました。申請用紙は連盟理事が用意していますので、ぜひ申請していただきますようお願いいたします。

「幽玄」50号発刊を記念して

50号を記念して、「幽玄」に縁の深い方々にコメントをいただきました。

(1)　幽　玄　1990年10月6日　第1号

幽玄

創字 高秀青信横浜市長

横浜能楽連盟 会報 No.1 平成2年10月6日発行

新堀豊彦（会長）

「幽玄」の発刊にあたって

●新堀豊彦　横浜能楽連盟会長

「能」は世界一厳しい美、様々な日本人の情念や心を、そしてドラマや綾り織を能楽の美しさに昇華して、今日まで演じ続けられて来ました。いう、まさに私たちにとって「魂のふるさと」ともいうべき存在ではないでしょうか。科学技術文明の強ろしいスピードと人間性の喪失の流れの中で、人間が自然や人間の心の奥深くかけ上る美術や歌舞伎、能楽の世界に向って不思議でもあります。日本人の原点に思いを馳せて、「能」は、いまこそ、今日でも、りっぱに鑑賞と観光の魅力を発揮しています。

「能」を現代社会の中で、マイノリティにしてはならないという気持ちで、私たち能・謡曲の愛好者たちは、能一筋大会後、いちはやく五流あいつぐ能楽連盟を結成し、「横浜能」を発揮し、素人衆の絵舞台としての「五流合同謡曲大会」を企画して来たのであります。

またさらに、ほんものの「能」をより多くの市民の方々に、正しく鑑賞して頂くために、本格的な能楽堂を横浜に建設することを永年にわたって促進し、三年前に芸能記念会員能舞台として横浜市庁によって開設されている。よって、今年五月末、市議会において、市民会館の各能楽者を網羅し、市民会館の各能楽者を網羅し、さらに能楽者を網羅し、きて、能楽者を網羅し、能楽者を網羅し、能楽者を網羅し

浜能楽堂は、少々異なった花を咲かせている。これも、「進取の気風」という土壌があったればこそ。来年は開館20周年、これからどのように枝葉を伸ばしていくか、もう一度しっかりと考えてみようと思う。

「幽玄」編集を担当した時の思い出

前編集主幹　粂　亮一

「幽玄」50号の発行おめでとうございます。私も短い期間でしたが「幽玄」の編集に携わったことは、誇りに思います。

私が担当した期間は、発行番号で示しますと29号から47号までの9年間でした。

この間にあった主な出来事を示しますと、まず2006年春季（第31号）には、横浜能楽堂開館十周年記念行事として4月1日から7月23日までの期間で各流派による能・狂言が特別公演として開催されました。

2008年秋季（第36号）では、横浜能楽連盟発足六十周年記念として、山崎有一郎氏（横浜能楽堂館長）・中田宏氏（横浜市長）・松沢成文氏（神奈川県知事）その他の方々の祝辞を掲載した特別記念号を発行しました。またそれに関連した記念行事として、「第24回五流能楽大会」で『NPO法人・子どもと生活文化協会』九頭龍クラブの「特別出演」による子供創作能「九頭龍」が行われ、観客席からわれんばかりの喝采を受けていたのが印象的でした（第37号にて紹介）。

平成22年度定期総会（2010年）では役員人事の改選が行われ、永い間会長を務められた新堀豊彦氏が辞意を表明され、新たに新会長として藤本圭佑氏が選出されました。第40号では新旧会長の挨拶を掲載いたしました。

2013年の「第16回五流交流のつどい」からは、新企画として学生（国学院大学・観世会）による仕舞が行われました（第46号に掲載）。これは若い人達に興味を持っていただくのが目的で、今後も各大学の能楽サークルに声をかけ、毎回出演をお願いすることになりました。

これまで他人の文章を編集したり校正したりしたことなどなく、自分にそのような能力があるとは考えられず、各流派から1名ずつ選出された編集委員の皆様のお力を借りて、編集会議で編集・校正等にご協力いただき、「幽玄」を無事発行することができました。執筆者ならびに編集委員の皆様に感謝しております。有難うございました。

これからも「幽玄」が100号に向かってますます発展していきますように。

第18回五流交流のつどい

金春流　水野　次郎

平成27年3月14日（土）、横浜能楽堂において開催されました。番組総数は38番（内訳は連吟3、素謡17、仕舞17、独鼓1番）、出演者総数は延べ271人でした。

大会の準備におきましては、余裕をみて平成26年10月2日の理事会で「開催要領案」を提出し、各流派責任者に出演申し込みについて「要領」を説明してお力添えをお願いしました。そのおかげで、出演申し込み時点から、番組編成、番組の下刷り・校正にわたる作業が順調に進み、明けて新春2月には、予定通り関係者の皆様に番組発送を済ませることができました。

なお、今大会には特別招待として、早稲田・国学院大学から学生さんを迎え、「高砂」「羽衣」の仕舞2番で出演していただきました。若い方々の出演は「つどい」に活気を一つ添えていただいた感じで、大変好評でした。これからもぜひ、若い同好の皆さんを交えての「五流交流のつどい」が継続され、いっそう充実した大会に発展していくことを望みます。

運営面では、当日11番目に出演予定の連吟「頼政」が休演となり、12番以降を繰り上げ進行ということになりました。加えて15番と16番、18番と19番を進行途中で入れ換える事態となりましたが、関係者各位のご理解とご協力により共に異常なく進行できましたことを、改めて感謝いたします。

もう一つ、今回はお昼の弁当が依頼先の都合で業者が変更となり、トラブル発生を心配しておりましたが、業者と事務局の方々の配慮によって、価格や衛生面で問題なく受け渡しがなされたことに安堵しております。弁当につきましては、これからも「安全・安心」を第一に考えて運ばれるよう期待します。

最後になりましたが、今回初めての試みとして、連盟機関紙『幽玄』の号外を発行させていただきました。内容等につきましては、発行の主旨をご理解のうえ、ぜひ継続発展に努めてくだされば幸いです。

附祝言

観世流　平戸　仁英

およそ40年も前のことになりますが、高知県安芸市在住の親族の婚礼に招かれたときのことです。一通りの儀式を滞りなく終えて夜になり、新郎新婦が親しくしている友人や、お手伝いに来て下さった近隣の方達だけの、くつろいだ宴席が設けられました。驚いたことに、一通り酒が回ったあと、誰が言い出した訳でもないのに、自然に次々に謡い出したのが謡曲の小謡でした。土地柄、喜多流の謡でしたが、私も興に乗って、観世流で「岩船」を謡いました。

また、長野県の友人によると今でも年配者の会合があると、「お肴」と称して小謡を次々に謡うのだそうです。ですから、少なくとも3、4曲の小謡をいつでも謡えるように心がけているのだと聞きました。

都会ではこのような宴席で謡う風習は無くなっていますが、小謡としては、謡会の最後を飾る「附祝言」、もしくはそれが追悼などの不祝儀の際は「追加」として存在しています。

「附祝言」は、ほとんどの場合、「高砂」のキリ、いわゆる「千秋楽」ですが、その他にも結構いろいろとあることは周知のことです。私の経験で言えば

「千秋楽」に次いで多いのが、「猩々」。何を謡うかは、会の最後の曲（素謡であれ仕舞の地謡であれ）を担当する地頭が指令を出しますが、「高砂」が8割、「猩々」が2割くらいの割合でしょうか。「岩船」はこれまでに2回ほどでした。「猩々」を謡うのは、終了時間が切迫していて少しでも早く終わりたいとき、もしくは、人様のお宅にお呼ばれして謡会を催し、最後のお開きに祝辞代わりに謡うときに限られているようです。

先日、さる同好会の席上で附祝言の小謡にどのようなものがあるのかが話題になったとき、ある流友に「それは、明日は蒼いし（あしたはあおいし）」なんですよ」と教えられました。ご存知の方も多いのでしょうが、私は初めて聞くことでしたのでその方への感謝の気持ちを込めて以下にご紹介しておきます。

あ＝淡路、し＝猩々、た＝高砂は＝伯楽、あ＝嵐山、お＝老松い＝岩船、し＝代主

（ただし、「伯楽」は観世流にあるのでしょうか。おわかりの方ご教示ください。）

「いにしえ」のことども

観世流梅若会　堀内　万紗子

横浜能楽連盟といういかめしい名前がついて、そして「幽玄」が発行されて25年、本当に光陰矢の如しです。連盟は、五流相つどって謡・仕舞を立派な舞台で発表し合う、輝かしいお集まりだと思います。

初代庄司会長（横浜能楽謡曲連盟）の「手伝いなさい」とのご命令で、何もわからない、何もできない紅一点の頑張りが始まりました。横浜能の催しが決まり、いざ出陣の日。一列に並んで厳かにかしわ手を打ち、横浜能が立派に成功しますようにと祈りを捧げるのでは…と想像したのは私だけで、あれやこれやと賑やかに終わりました。当初は青少年ホールや県民ホールを拝借しての横浜能でしたが、やがて立派な横浜能楽堂が平成8年に完成し、平和と、古典の継続の象徴であると感激しました。

現在の私共にとって謡・仕舞は健康維持のバロメーターとなっています。テレビでもよく聞きますように、大きな声をお腹から出すことがよく、そして摺り足は臀腰筋を鍛えるのだそうです。

私は、小学生の折に仕舞のお稽古をするように両親から言われ、いやいや始めたものです。当時は朝日舞踊団に入って楽しく踊っておりましたので、仕舞や謡はおじい様、おばあ様のものと思っておりました。『鶴亀』の「君の齢も長生殿に」の部分を「君の弱いのは盲腸」などと勘違いしたりしたものでした。

終戦後は、両親ともそのショックが大きくてお稽古どころではなく、私一人が師の門をたたいてお稽古に励み、外人に舞を見せる催しで拝借したお振袖を着て舞った記憶がございます。そうこうしているうちに、家事をしながらや車の運転中にも流行歌のかわりに謡をハミングしている私になりました。

やがて娘も息子もお稽古に励むようになり、親子で『猩々の乱』のお能なども出しました。また父が82歳の折には、二人の子と共に祖父と孫での『鶴亀』のお能もでき、父は能衣装の重さも忘れて喜んでおりました。

主人も小さい時からおじい様に見台の前に座らされてお稽古してきた、謡の愛好者です。家族旅行も国内は全て謡関係で、主人がプランを立てて出かけておりました。

私も86歳になりました。これからも、老若男女謡を謡って六百余年の齢の維持と健康に留意してまいりましょう。

私にとっての能楽

喜多流　金子　雅代

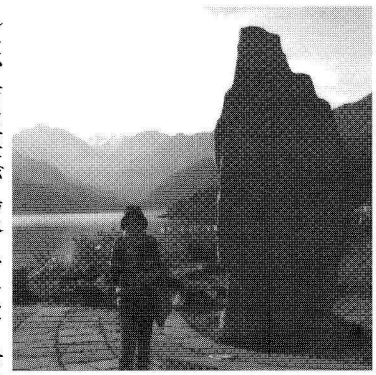
はたと気づいたら、能楽に親しんで10年が過ぎていた。長くお稽古をしている方の多いこの世界では、たかだか10年とも思う。でも、50代でお稽古を始めた私にとって、謡は唯一無二の癒しの時間。仕事をしていた時ももちろんだが、退職した今では、生活の中心と言っても良いくらいの存在である。

【そもそもは　神を慰むる舞
舞う度に　我が心慰むる
この不思議】

月2回のお稽古は、自主練習はしていなくとも、どんなに忙しくとも、別世界に誘ってくれる貴重な時間で、いそいそと通った。また、喜多流職分による月1回の自主公演は、どんなに疲れていても、行けば元気になって、翌日からの仕事に励める大切な時間だった。美しく良い能に出会えた時の本当に幸せな思いは、何時も私を最高に癒してくれた。

仕事を辞してからは、念願だったお笛のお稽古も始めた。最初は音も出ぬ稽古に泣きながらも、今では楽しく、ご近所迷惑も顧みず毎日のように手にしている。殊に東日本大震災直後、不安な気持ちを鎮めてくれたのはお笛で、拙いながらもお稽古をしていて良かったと、どんなに思ったことか…。

退職後再開した海外旅行も、殊に中国では、謡曲に因んだ所（例えば、楊貴妃と玄宗皇帝の華清宮や日月山、昭君のタイル画等）に行き、より旅を楽しむことができた。先日も自主公演で『西王母』を見たが、私が訪れた、西王母が湯浴みしたと言われる天池は、すごく美しく、静寂で、とても印象深かった。海抜2千メートルのウルムチ天山山脈博格達峰の中腹にあるため、9月でもとても寒く、遊覧船の船着き場近くでは、軍隊の払い下げかと思われるようなコートの貸出しまでしていた。もちろん、桃の樹も植えられていた。残念ながら実を見ることはできなかったが…。ここでは西王母は道教の神様として、池の脇の御堂に祀られていた。五色の幟が飾られている桃の樹の前で、現地のガイドさんに「日本の謡曲に『西王母』という曲があって…」と話をすると、それまであまり笑顔の無かったウイグルのガイドさんの顔がほころんだ。私も嬉しく感じたことを覚えている。



能楽に親しんでいたお陰で、（先生方には、覚えの悪い弟子でご迷惑をかけているが）とても幸せで豊かな老後が過ごせていると思っている。

お酒が登場する謡曲（続）

宝生流　吉田　澄夫

前号に引き続き、酒の登場する謡をご紹介します。まず、化け物・鬼退治の武勇譚では、すぐに思い浮かぶのが「大江山」です。「面も色づくか。赤きは酒の科ぞ…」と登場する酒呑童子は、何とも人懐こい憎めない鬼なのに退治されてしまうのです。もう一つが「大蛇」。スサノオノミコトがヤマタノオロチに酒を飲ませ、酔いつぶれたところを退治するという神話を題材にした曲です。

また、「松虫」は謡曲では珍しく居酒屋に集う市井の男達の物語ですが、その中で酒の功徳を「白楽天が酒功賛を作りし琴詩酒の友。…遊楽遊舞の和歌を詠じ人の心を慰め給え」と謡っているのが面白いですね。

ところで、当時のやんごとなき方々は盃を水に浮かべて和歌を詠む曲水の宴とか、花見や月見など四季折々に優雅な宴を楽しんでいますが、謡にはそのような場面も結構出てきます。老母の病を気にしつつも無理やり花見の輿車にに同車させられる「熊野」。拍子を揃え袂を翻して舞う采女らが描かれる「采女」。貴賤郡集の桜狩に誘われて業平の亡霊が現れる「小塩」。神泉苑の曲水の宴で天子が捕らえた鷺に五位の位を授ける「鷺」。王の御代を寿ぐため仙界の西王母が仙桃の実を持って現れ、曲水の宴で舞う「西王母」。「遊女の歌う船遊び…」と優雅な情景を描いた「江口」も、酒宴について直接言及してはいませんが、遊女の船遊びとくれば酒席が付きものでしょうから、お酒が登場する曲の一つに加えておきましょう。

美しい上臈に化けた鬼の宴に誘い込まれて酒を飲まされた平維茂が、女の正体を見破って退治するという「紅葉狩」。さながら現代なら繁華街の怪しげな店に誘い込まれた男が身ぐるみ剥がされそうになる話、といったところでしょうか。この謡には酒好きの心理を見事に表した詞章があります。「林間に酒を温めて紅葉を焚くとかや」ときたら酒の芳香に鼻がヒクヒク、たまりません。いったんは誘いを振り切っても「…一河の流れをくむ酒をいかでか見捨てたもうべきと…袂に縋り留むれば…心弱くも立ち帰り…盃に向へば変る心かな」と、もうデレデレです。でも、一番の謡い所のクセ謡の中に「殊に飲酒を破りなば邪婬忘語ももろともに。乱れ心の…」とならぬようにと戒めの言葉も添えられているところが心憎いばかりです。酒好きの御同輩諸兄、飲むのはいいけれど呑まれぬよう心しましょう。

古典芸能の愛好者

金春流　横山　千恵子

久良岐能舞台での「謡と仕舞の教室」に出会い、お稽古を始めて18年になります。先生は金春流シテ方職分の守屋泰利師。初めの頃は謡の詞章が聴き取れず、眼は謡本に釘付けでした。仕舞は先生の妙なる謡と端麗な型の舞にすっかり心奪われ、夢中になってお稽古に通いました。修了後も個人稽古のほか、教室の先輩・後輩の方々と「久謡会」を作り、月1回久良岐能舞台で稽古を続け、能楽連盟の五流交流会にも参加しております。

久謡会のお一人に歴史の専門家がおられ、毎回、謡曲に関連した人物・出来事・謡蹟など多種多様な情報をまとめて、資料として配ってくださいます。また20代で謡を始めて仕事の都合で中断し、退職後再開された方数名、海外生活経験者数名と、人生経験豊かな方々とご一緒できて、折々のお話から世界が広がる楽しさも感じております。

謡の詞章も聴き取れるようになって、古典文学の伊勢・源氏・平家物語や多くの和歌集を題材にした「能」を鑑賞する面白さも覚えました。能楽の奥の深さを知るほどに、お能の魅力を一人でも多くの方に知っていただきたいと思いますが、能楽の愛好者は年々減少しているそうです。古典芸能の世界はいずこも似たような現状で、私のもう一つの趣味の箏曲の世界も同じようです。ただ、最近では学校の音楽授業に箏・三絃などの邦楽器が取り入れられるようになり、関心を持つ若い人が出て来ていると聞いています。

能楽堂でも、子供向けの企画などの試みや、能楽連盟の「若い世代との交流」など、普及に努められています。鑑賞だけでなく、実際にお稽古する若い愛好者が増えてくださることを願っています。

日本の古典芸能は、各々独自の歴史と伝統を持って重層し、並立して存続していると言われています。箏曲にも葵上・砧・桜川・夕顔・八島などの曲があり、浄瑠璃や歌舞伎にも共通の題材から作られた演目があります。その曲や演目の構成、表現の違いなど、古典芸能の幅の広さ、奥の深さを楽しむ愛好者が増えて、更に発展して後世に受け継がれていくことを祈っております。

「横浜金剛会」について

金剛流　豊増　清明

横浜能楽連盟が、横浜能楽謡曲連盟として発足した昭和23年当時、横浜在住の金剛流を代表し、連盟の理事・相談役としてそれぞれ1名の方が参画している。しかし、金剛流の先輩達がどのような形で連盟の行事に関わってきたのかは、その後のことも含めて定かではない。

横浜在住で、金剛流を学ぶ素人の会員が、連盟の活動に参加し始めたのは、昭和62年からである。その年の5月に開催された「第2回横浜五流謡曲大会」に、当時の連盟会長新堀豊彦氏の勧誘を受けて、石川島播磨重工業㈱（現IHI、以下IHIと記す）横浜謡曲部の部員が中心となって参加し、連盟に参入したのである。

IHIは、昭和40年、横浜磯子地区に新工場を開設し、同社各地区工場から従業員の移動を行った。その移動者の中に、東京地区工場で金剛流を学んでいた人達がいた。この人達が中心となって、横浜の各工場で、金剛流師範の指導による謡曲・仕舞の稽古を始めた。これらの会は、横浜謡曲部としての独自の発表会や、IHI他地区工場の謡曲部との合同発表会などを開催していたが、社外の活動への参画はなく、先に述べた昭和62年が初めての機会となった。そしてこれを契機として、IHI社内だけでなく、広く横浜地区で金剛流を学ぶ素人の会派に呼びかけ、金剛流宗家の承認も得て、「横浜金剛会」を結成した。

この間の会の発足の準備・推進においては、当会初代会長（前会長）望月悦夫氏等のご貢献によるところが大きい。以後当会は、連盟主催の各種行事に積極的に参加するようになった。平成8年6月に完成した横浜能楽堂の建設にも、望月会長以下が力を尽くした。

当会では、会の年間行事として、各会派が一堂に会して日頃の修練の成果を発表し合う「謡曲と仕舞のつどい」を開催している。これは平成11年を第1回として毎年1回、8月の下旬に横浜能楽堂で開催されるが、本年はその第17回が8月23日に本舞台で行われる。素謡・連吟10曲、一調1曲、仕舞29曲の予定。

当会は、現在9つの所属会派で構成されており、会員数は、110名を数える。

謡を習うついでに

下懸宝生流　安藤　春木

私も、本紙第48・49号に寄稿された藤田忠弘・井上祐成両氏同様、早稲田大学の学生時代から50年以上当流の謡を習っているが、当流の歴史、謡の特色、師匠の宝生弥一・宝生閑両先生のこと等については、既に両氏が詳しく書いておられるので、今回は話題をガラリと変えてみたいと思う。

謡を習うことによって得られる効用として「謡曲十五徳」などと言われることがあるが、私の場合は、効用というよりも言わば謡を習うついでの余禄として、国内旅行の先々で謡に関連する場所を訪れるという楽しみを得ている。

そういった場所はもちろん全国にわたって数え切れないほど存在するのだが、中でも圧倒的に多いのはやはり京都・奈良である。私はこれまでに、清水寺（湯谷・田村）、下鴨神社（班女）、嵯峨野（嵐山・小督・野宮）、大原（小原御幸）、鞍馬寺（鞍馬天狗）、宇治（頼政）、長谷寺（玉葛）、大神神社（三輪）、当麻寺（當麻）、猿沢池（采女）等、あちこちを訪れているが、京都は市街全体が史跡のかたまりのようなところなので、ブラブラ歩いていると偶然そういう場所に行き合うことが時々ある。これがまた楽しい。意図して訪れたのではなく、思いがけずそういう場所に行き合うのは、理屈抜きで嬉しいものである。

そのようにして私が京都で偶然行き合った場所としては、他の人々にとっては何でもないところかもしれないが、地主権現（田村）、六道の辻・経書堂・子安の塔（湯谷）、誓願寺（誓願寺）、鉄輪の井戸（鉄輪）等があるが、傑作は堺町通松原上ルにある夕顔の墓（夕顔）である。あいにく個人宅の敷地内にあったため実物を見ることはできなかったが、「実在の人物ではないのに」などと野暮なことを言わないところが、京都人、いや、日本人の高度な知的・文学的遊び心の表れと思えて面白い。そう言えば、その辺りの町名が夕顔町となっていたのも、妙に納得できるのである。

能楽堂だより　27年10月～28年3月の公演案内

10月以降の横浜能楽堂の公演予定は次の通りです。このほか毎月第二日曜日に普及公演「横浜狂言堂」を、28年3月19日（土）に普及公演「バリアフリー能」を開催いたします。

第32回横浜かもんやま能

10月4日（日）午後2時開演
能楽師による実技と解説　鵜澤久
狂言「月見座頭」（大蔵流）茂山千五郎
能「隅田川」（観世流）観世銕之丞
S席四千円／A席三千五百円／B席三千円
チケット発売中

「能の五番　朝薫の五番」

平成28年1月16日（土）午後2時開演
第2回「羽衣」と「銘苅子」
能「羽衣」（観世流）浅見真州
組踊「銘苅子（めかるし）」　宮城能鳳
S席七千円／A席六千円／B席五千円
チケット発売日　10月10日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）

企画公演「生と死のドラマ」

第1回「老いをどう生きるか」
1月30日（土）午後2時開演
講演　高橋睦郎（詩人）
狂言「枕物狂」（大蔵流）茂山千五郎
能「鸚鵡小町」（喜多流）香川靖嗣
第2回「死者の行く先」
2月11日（木・祝）午後2時開演
講演　多川俊映（興福寺貫首）
狂言「政頼」（和泉流）野村萬斎
能「重衡」（観世流）味方玄
第3回「『忠』と『情』の選択」
2月20日（土）午後2時開演
講演　西野春雄（能楽研究家）
狂言「武悪」（大蔵流）山本東次郎
能「仲光　愁傷之舞」（観世流）野村四郎
第4回「万物に宿る生命」
3月21日（月・休）午後2時開演
講演　山折哲雄（宗教学者）
狂言「野老」（和泉流）野村万作
能「芭蕉」（宝生流）武田孝史
◎セット券…S席二万八千円／A席二万四千円／B席二万円
◎単独券…（第1回）S席一万円／A席九千円／B席八千円　（第2～4回）S席七千円／A席六千円／B席五千円
チケット発売日
セット券…発売中
／単独券…10月24日（土）正午から
（初日は電話・Webのみ）

◆編集後記◆

能楽連盟の機関紙である「幽玄」は、1990年（平成2年）に第1号が創刊されました。以来25年、春・秋の年2回発行を重ね、今号で50号を数えます。これまでの紙面には、能楽普及に尽力された方々の記事や、会員の皆様が能の世界を楽しむことで人生を豊かにしている様子などが掲載されています。

能楽連盟は、減少し続ける能楽愛好者を少しでも増やすべく様々な試みを続けています。その一助となるために、「幽玄」の果たすべき役割はまだまだ多いと思います。

横浜能楽連盟連絡先
◎事務局　倉藤
TEL〇四五―八三五―二三六一
◎横浜能楽堂
TEL〇四五―二六二―三〇五〇